

衣服の買い物行動のもつ豊饒性

—「変じゃないですか？」をめぐる相互行為分析—

堀田 裕子

摂南大学

yuko.hotta@setsunan.ac.jp

Richness of the Clothes Shopping Experience: Analyzing the Interaction “Doesn’t this look weird on me?”

HOTTA Yuko

Setsunan University

Keywords: Shopping, Video Ethnography, F-Formation, Transformative Answers

要旨

本稿では、衣服の買い物行動場面、なかでも試着接客場面に焦点化し、衣服と身体の関係性、および試着中におこなわれる相互行為の特徴を分析することで、その豊饒性を明らかにした。試着者は「被服性の呈示」を通じて、身体による衣服の対象化実践をおこないながら、試着中の衣服に対する他者からのコメントを引き出すことを可能にしている。また、同じ衣服であってもサイズの違いによって印象が変化し、気に入らなくなる場合があることから、衣服と身体との間に「変形的関係性」が存在することが示唆された。

今回の調査において特徴的であった場面として、店員の「どうですか？」という質問に対して客が「変じゃないですか？」と応答する場面からは、「変容的返答」として店員の質問を遡及的に無効化するだけでなく、F 陣形の変容を誘発し、ホームポジションである「チェックマーク型配列」から「対面配列」への移行をもたらした。当事者たちは、これに伴い口調を変化させ、「客 - 店員」から「友人 - 友人」へとカテゴリーの変容も起こすことで、異なるパースペクティヴから感想を述べることを可能にした。

また、この「変じゃないですか？」という否定疑問文の質問は、発話者の主張として機能し、話を発展させていた。そして、最終的には客はファッションに関する知識を有しない「素人」、店員はそれを有する「専門家」へと互いにカテゴリー化を実践していった。

このように、衣服の購入および試着接客の場面は、身体と衣服、空間と関係性、知識とカテゴリーが交差する、複合的な意味生成の場なのである。

1 はじめに

買い物は楽しい。とくに、衣服の買い物には新しい自分のあり方を探究するという側面があり、その意味で創造的な楽しさもある。しかし、衣服の買い物にはその過程自体に豊饒性がある。

本稿では、衣服の買い物行動場面のなかでも、とくに試着接客場面を通じて見えてきた「発見」について考察する。衣服の試着接客場面に着目する理由は大きく分けて2つある。

1つは、衣服と身体との実際の関係性への関心である。衣服と身体は、身体のサイズに合う衣服を装着するというように、組成的な（formative）関係性のなかで捉えられてきた傾向がある。「formative」および「formation」は衣服に関してあまり一般的に使われる語ではないが、ラテン語の「forma」（形、姿、外観など）を語源とする。「formal」には「形式的な」「正式な」「公式の」といった意味があるが、「フォーマル着」（formal wear）はまさしく「組成的な」（formative）な身体との関係性のなかで解される衣服の代表であると言える。そこでは、衣服と身体とはまさに「マッチング」のごとく関係性があり、着せ替え人形にとっての衣服と同様に、身体にぴったりと合っていることが理想的である。「formation」の対義語にあたるのが「変形」（deformation）であるが、フランス語の「déformer」（デフォルメ）という語の方がより一般的にその意味は知られているかもしれない。実は、衣服と身体とは相互に「変形的な」（deformative）関係性にある。たとえば、大きめ／小さめの衣服を着用することでさまざまな印象をつくり上げたり、同じ衣服が着用者や組み合わせ、着方によって異なる印象を形成したりする。また、衣服の側が身体に一定の動きや態度を促すこともある。さらに、着用する衣服によって身体それ自体の見え方も変化するのである。こうした関係性のとらえ方および対比は——あまり一般的でない語を使用せざるを得ないという事実が示しているように——あたりまえのようではあるが、あまり一般的なものではない。そして、こうした衣服と身体との実際の関係性をもっとも顕著に現れるのが試着接客場面ではないかと考え、当該場面のビデオ・エスノグラフィー研究をおこなっている（堀田 2021, 2023a, 2023b）。

もう1つは、装飾行為における、語られない、あるいは、語りえない動機の探究への関心である。ある衣服をどのようにして購入するに至るのか。ある装飾品をなぜ身につけるのか。こうした問いに、インタビューやアンケートによって取り組む試みが為されてきた。もちろんそうした先行研究の功績は大きい。しかし、そうして明らかになる動機は意識的なものであり“外向き”のものである。筆者は、装いにおける「見られているが気づかれていない」（seen but unnoticed）さまざまな事実を明らかにしたいと考えている。

たとえば、衣服の買い物研究としては、荒川・木戸（2023）が興味深い。ここでは、衣服を探索する際の自分の気持ちを録音してもらい（同伴者は聞き役）、その記録に基づいて思考プロセスを明らかにしている。ただ、気持ちをすべて口にするには難しい局面があると思われ、たとえば「かわいい」「自分に似合いそうだ」「〇〇さんが似たようなものを着ていた」「予算内」といったことを同時に思いながらも、そのうちもっとも“外向

き”の動機のみを語る場合があるであろうし、そもそもある店舗に入ること自体が、特定の趣向やブランドへの志向を含んでいることもある。また、店員や同伴者の影響も少なからずあるだろう。したがって、語られないものを明らかにする意義があるように思う。

また、衣服が個人にもたらす影響という点では、ファッション・セラピーの観点も重要である。泉（2006）はファッション・セラピーとして「専門家による患者の服装に対するアドバイス、化粧・ヘアスタイル・デザインなどの教育と訓練、患者自身がデザイン・製作した衣服を着用して出演するファッションショーなど」を挙げている。「セラピー」を掲げていることから、そこでは専門家の存在が重要な役割を担っており、専門家主導で装いがつくり上げられていく。

先行研究に共通するのは、衣服それ自体および専門家の有する知識やセンスの優越性といった「価値」が前提されていることである。荒川・木戸（2023）においては、自己の身体にどれだけフィットするか、あるいは、予め持っていた身体イメージや欲しい衣服にどれだけ近いかといった観点で、もっぱら前提された価値に基づき衣服が「探索」されているように見える。しかし、実際の購買場面では、同伴者や店員との相互行為および会話のなかで購買意欲が形成されていくことがあり、当初購入しようと思っていたものとは異なるものが欲しくなることもある。また、ファッション・セラピーのように専門家が患者の装いに関与することは、衣服の買い物において専門家がもつ“効果”とは異なるものである。実際の買い物場面において、“専門家”が客にいくらある衣服を勧めても、客自身が気に入らなければ、また、客が想定しているシチュエーションに適していなければ、そして支払うことができなければ、購入に至ることはない。“専門家”が提案する装いは、無条件に受け入れられるわけではなく、客の好みや普段の装い、所持しているアイテムとの関係などによって、創造的かつ協働的につくり上げられていく。その過程を調査研究するうえでは、ビデオ・エスノグラフィーおよび EMCA の観点が重要になってくると考えられる。

衣服のショッピング場面の研究は、どんなショッピングにもまして創造的な性質を、私たちに教えてくれる。それは、ショッピングそれ自体のもつリハビリとしての可能性でもある。私たちは、ショッピングリハビリ事業において、楽々カートの有用性のみならず、ショッピングという活動それ自体の豊饒性にも注目してきた。たとえば、店舗で見た新製品の情報を家族に披露し、「家庭内インフルエンサー」としての地位を確立させる高齢者の事例²⁾など、買い物行動にはまだ見出されていない波及効果があると考えられる。本稿における衣服のショッピング場面についての考察が、ショッピングリハビリ事業のさらなる可能性を開くであろうと考えている。

2 試着行為における自己呈示と他者評価の構造

本稿で扱うデータは、2024（令和 6）年 9 月にショッピングリハビリ事業の一環として三重県いなべ市にあるショッピングセンター「イオン」において実施した、“コーディネート

ート・イベント”の場面である。通常、「イオン」の衣料品売場にコーディネーターは常駐しておらず、客は自分で衣服を選び試着し購入するかどうか判断するのだが、今回は、ショッピングリハビリカンパニー株式会社と摂南大学現代社会学部の檜田美雄教授が代表を務める挑戦的研究（萌芽）の協力を得て、愛知県名古屋市からセレクトショップ³⁾のコーディネーターを招聘し、衣服選びをサポートしたりその着方を提案したりしてもらうというイベントを開催した。リハビリの一環として参加した方のほか、イベントを目的に参加した方やそのサポーターとして参加した方なども、調査・撮影に御協力くださった。なかでも今回は、イベントのサポーターとして参加した 50 代女性とコーディネーターとの試着接客場面に焦点化する。

2.1 被服性の呈示

以下の断片では、A（イベント参加者）、B（コーディネーター）、R（調査者）が登場する。全員が 50 代女性である。A は身長が 170 cm ほどの痩せ型で、福祉関係の仕事をしている。仕事着は「襟付」でなければならず、この日は“ノーカラー”のブラウスを着用していた。仕事時に着用できる衣服が欲しいということで、B と共に店内を回る。A は B が提案する衣服に 1 つ 1 つ難点を挙げていきながら（値段が高い・デザインが好みでない・仕事に適さない等）、お腹やお尻が隠れるくらいの着丈があることも希望していた。

最終的に、B が見つけたダークグレーのノーカラーブラウスを試着することになった。後ろにボタンが 3 つ付いた、胴回りがかなりゆったりしたデザインの衣服である。A は身長が高いが細身であることとこの衣服のデザイン性から、B は「M サイズ」を選ぶ⁴⁾。A がそれを試着し、試着室から出てくる場面が次の断片 1⁵⁾である。

断片 1 コーディネーターが選んだ衣服の M サイズを着る

((A が試着室のカーテンを開け始める))

01B : あ(.)は::い(.)°お疲れ様でした::ん°((A がカーテンを開けているのを手伝う))

02A : ((首元を触りながら靴を履く))

03B : どうです(.)か？

04A : いいです[よ(.)うん hhh((腕をやや広げてから首元を触る))

05B : [あ(.)い:い:うんうん(.)あれかな(.)ちょっときゅっとしますか?°(.)ね

06A : なんか((鏡に向かって背を向けて鏡を見る)) ()

((腕を広げて B に背を向ける)) 図 1

07B : あ(.)大丈夫ですよ()=

=でも(.)エルでも[よさそうな気がしますけどね()]背が高いからかな

08A : [あ:

09B : °う:ん°ちょっとエル持ってきますね

10A : は::い

A は首元を触りながら靴を履き、試着室から出てきて、試着室内の鏡を見る。B が「どうです(.)か？」

(03 行目)と質問すると、「いいですよ」と言って腕をやや広げる(04 行目)。しかし、A が首元を触っているのを見て、B が「ちょっときゅっとしますか？」と尋ねると、A は鏡に向かって背を向けながら振り返りながら鏡を見て「なんか」(06 行目)と応答する。

「なんか」の後ろは聞き取ることができないが、はい／いいえで答えることのできるクローズド・クエスション(05 行目「きゅっとしますか?」)に対する応答

の「前置き」に聞こえることから、好ましくない内容の応答をしようとした可能性がある。この文脈では「ちょっと首元がきつい」といったところであろうか。A はその直後に腕を広げて B に背を向け、B に後ろ姿を見せる(図 1)。B が「大丈夫ですよ()でも(.)エルでもよさそう」(07 行目)と言うと、A は「あ:」(08 行目)と応える。この(「あ」ではない)「あ:」は、B の発話と A 自身の理解との間に齟齬がないことを表わしていると考えられる。これを受けて B は、店内に同じ衣服の L サイズを取りに A の元を離れる。

ここで確認しておきたいのは、まず「どうですか?」という B の質問に対し A が「いいです」と答えていることである。後ほど詳しく検討するが、この後、L サイズを着用することになるのだが、その時には異なる応答をしている。また、A が図 1 のように腕を広げる特徴的な動作をしていることである。この動作は、ちょうど衣服を着物用のハンガーに吊した時のような状態をつくり出しており、A が着用している衣服“自体”がどのような形であるかを示していると言えよう。そして、この場面を通して A が首元を触る動作をしていることである(02 行目, 04 行目)。

腕を広げる動作と首元を触る動作には共通性がある。それは、いずれも A がいま着用している衣服“自体”を対象化しているということである。衣服はしばしば皮膚に喩えられてきたように、着用した途端に身体と「一体化」する。私たちは、その衣服を身体＝皮膚から引き離し、身体の表面にまとわれている覆いとして「再分離化」することがある。それを筆者は、「被服性の呈示」(display of clothedness)(堀田 2023a)と呼んできた。これは、身に着けることで自己の一部と化した衣服(装飾品)を、自己とは別個のものとして焦点化し、その衣服(装飾品)を自己と他者の両方にとっての対象にすることである。腕を広げる動作の際に、A は鏡と B の方に背を向けていることから(図 1)、着用中の衣服と自己の身体、およびその関係性を、B にとっての吟味の対象としていることが分かる。

では、なぜ衣服と身体を切り離す必要があるのか。ひとつには、購入前の試着段階であることから、「まだ私のものではない」「まだ私と一体化していない」ことを示す儀礼的な意味があるだろう。しかし、もっと大きな理由として、衣服と自己の身体が「合ってい



図 1 A が腕を広げて B に背を向ける場面

るか」についての評価をしやすくすることが考えられる。それには次の2つの意味がある。第1に、衣服と身体とが一体化している状態で「かわいい」「変だ」などと評価することは、何を評価しているのかが曖昧になる。とりわけ試着者が鏡を見ながら、衣服と身体とが一体化したままで「かわいい」「すてき」といった肯定的な評価をすれば、自己賞賛となる可能性がある(堀田 2023a)。したがって、「再分離化」することで自分ではなく衣服の方を評価しているという呈示が可能になるのである。また、第2に——より根本的な意味として——、自己の身体と一体化しているものについて、たとえば顔の一部としての「鼻」や身体の一部としての「腕」について、自己の身体に「合う／合わない」という観点で言及することは難しい。しかし、これらの部位をいったん身体そのものから分離し対象化することで、フェティッシュなまなざしを獲得することができ、吟味や評価をすることが可能になる。そうすると、自己の一部について「合っていない」と言うことが可能になる——もっとも「合っている／合っていない」と言及するためには他との比較も伴うのではあるが、つまり、「被服性の呈示」とは身体による衣服の対象化実践であると言える。

さて、腕を広げる動作だけでなく、首元を触る動作にも、この「被服性の呈示」を見出すことができる。Aは試着室から出てくる時からこの動作をしており、途中で手を放しては、また首元を触っていた。Aは首のことを一切口にしていないが、Bは「ちょっときゅっとしますかね」と、このMサイズの衣服がAにとって小さい可能性に言及する。このように、試着中に特定の部位を触る動作は、その部位への関心を引きつけ何らかのコメントを引き出すことにもつながる。

2.2 「たぶん」と「うん」を通じた説得

Bは同じ衣服のLサイズを持ってくる。次の断片2は、AがそのLサイズを試着し、試着室から出てくる場面である。

断片2 Lサイズを試着する

01A : ((試着室の前に移動))

02B : ど:ですか(.)あ(.)楽な((カーテンを全開にする)) () やっぱり背があるから::ん::

03A : ((腕を広げてBに背を向ける)) nod 

04B : 丈感^{たけかん}もたぶんこっちの方がいいですね:[うん]

05A : [あ(.)そっか:]

06B : 幅はたぶん::エムでもよかったんだけど:

07A : あ(.)う[ん]

08B : [かたち:楽に着れそうな[かん-あの:このへんが(.)たぶん首[ですよ(.)う:]ん]

09A : [nod 



図2 Lサイズ試着直後にAが腕を広げている場面



図3 Aが襟元を触っている場面

A が試着室から出てきてすぐ B は「ど:ですか」(02 行目)と尋ねるが、それに対する A の直接的な応答はない。B は続けざまに「あ(.)楽な」「やっぱり背があるから」(02 行目)と、L サイズの方が A に「合っている」ことを表現している。それに対し、A は図 1 と同じく腕を広げる動作(図 2)をした後、頷いて同意している(03 行目)。ところが、次いで B が「丈感もたぶんこっちの方がいいですね」と言うと、A は頷く代わりに「あ(.)そっか:」(05 行目)と返す。だが、B の「幅はたぶん::エムでもよかったんだけど:」(06 行目)という発話に対しては、A は「あ(.)うん」(07 行目)と同意し、「首ですよね」(08 行目)の後には襟元を触りながら同意している(図 3)。

この場面を通じて、B は特徴的な話し方をしている。1 つは、「たぶん」の使用、もう 1 つは自分のターン末尾での「うん」の使用である。

まずは、「たぶん」の使用について。断片 2 において、B は断片 1 には出てこなかった「たぶん」という言葉を 3 回使用している。すなわち、1 回目は着丈(04 行目「丈感もたぶんこっちの方がいい」)、2 回目は身幅(06 行目「幅はたぶんエムでもよかった」)、3 回目は襟元に関して言及している部分(08 行目「たぶん首が楽に着れる感じ」)である。これらはいずれも A の着用感に関わる言及であるため、B は断定を避けた可能性がある。ただし、受け手にとってはやや発話内容に自信がないように聞こえるかもしれない。

しかし、A は、2 回目の身幅と 3 回目の襟元への言及箇所では同意しているが(07 行目と 09 行目)、1 回目の丈感への言及箇所では「あ(.)そっか:」(05 行目)と応答している。これにはやや違和感を覚えないだろうか。「あ(.)そっか:」は頷きとして使用されることもあるが、発話者自身以外の話題で使用される傾向があるだろう。ここでは外ならぬ A 自身の「丈感」をトピックとしているにもかかわらず、どこか“他人事”であるかのように聞こえる。これは、「あ(.)そっか:」が相手の発話それ自体への応答ではないか——言い換えれば、「丈感」が良いと思っている B の発話への A の応答であり、自分とは異なる見方に遭遇した際の応答ということである。つまり、この時から A は、B が着丈(「丈感」)に関して自分とは異なる意見を持つと認識し始めた可能性がある。

次に、Bによる自分のターン末尾での「うん」の使用について。Bは断片2において、この発話パターンを2回おこなっている。すなわち、1回目は着丈に関する言及（04行目「丈感もこっちの方がいいですね、うん」）、2回目は襟元に関する言及（08行目「首が楽に着れる、うん」）である。これらは「たぶん」が登場する発話でもある。この状況においてBが自分のターン内で「主張」と「肯定」をしているのは、相手の肯定を促そうとする「説得」の一形式であると考えられる⁸⁾。「たぶん」の使用によって断定を避けているように聞こえるのだが、Bはいま試着しているLサイズの方がAに適しているということを示そうとしているように見える。

しかし、Aが試着室から出てきてすぐのBの質問（「ど:ですか」）には、Aはまだ答えていない。

3 「変じゃないですか？」をめぐる相互行為分析

3.1 変容的返答と衣服 - 身体の相互変形的関係性

この後の断片3において、Aは試着中のLサイズの衣服に対してやや否定的なことを言い始める。

断片3 試着中のLサイズについてクレームを述べる(1)

10A : あ:°なんか°

11B : ど:ですか?((一步鏡側に移動しAを見る))

12A : ()変じゃないですか:?(自分指さしながら)

13B : ぜん-え(.)なんで?全然(.)かつこいいと思う

Aが「あ:°なんか°」（10行目）と何か言いかけると、Bがすぐさま「ど:ですか?」（11行目）と尋ねる。これは、Aがその続きを話すようBが促しているように見える。するとAは自分を指さしながら「変じゃないですか:?」（12行目）と聞き返す。これに対し、Bは驚き（「ぜん-え(.)なんで?」）、「かつこいいと思う」と言ってAの試着姿を褒める（13行目）。

「変じゃないですか?」「おかしくない?」といったフレーズは、装飾品が自分に似合っているかどうかを尋ねるもので、試着接客場面のみならず装い場面全般でしばしば見られる。この発話が為される背景として、多少なりとも発話者が似合っていないのではないかと考えていると考えられるが、普段は着用しないようなアイテムや組み合わせ、着方などをした際に発せられることが多いだろう。

「ど:ですか?」というBの発話に対する「変じゃないですか:?」というAの応答は、次の2つの観点で見ていく必要がある。第1に、Mサイズの時気に入っていたこの衣服が、なぜLサイズになると気に入らなくなったのかという観点である。断片1において、Aはこの衣服のMサイズを着た際、Bに「どうです(.)か?」と質問されて「いいですよ(.)

うん」と応答していたのである。第2に、断片3における「ど:ですか?」は、Aの「なんか」の続きを促すための発話であると同時に、Aが試着室から出てきた際の「ど:ですか」というBの質問——まだ応答を聞けていない質問——の繰り返しではないかという観点である。「どうですか?」はオープン・クエスチョンであるためさまざまな応答が想定されるが、これは「気に入った／気に入らない」という単純な二分では表現しづらいことも、客に自由に表現してもらうための工夫であると考えられる。しかし、「ど:ですか?」という質問に対して、直後に「変じゃないですか?」という質問をするのは、会話形式として違和感を覚えるばかりか、内容的にもAの質問が別の次元にすり替えられているように聞こえる。この2つの観点について、以下で詳しく考察していきたい。

まず、第1の観点について。私たちは、自分の身体にぴったり合う衣服が理想的だと考えがちである。したがって、試着した衣服が小さければ、もう一つ大きなサイズを試着してみる。ワンサイズ上がろうと、同じパターン、色、素材でできていれば同じ衣服である——これは衣服と身体とを「組成的関係性」でとらえた場合の見方である。この観点に立てば、Mサイズで気に入っていた衣服がLサイズに変わった途端に気に入らなくなるということが起こるはずはない。しかし、ここでAは「変じゃないですか?」「なんか違和感」とクレームを述べ始める。つまり、Aにとって、このLサイズを試着した時の印象が、先ほどのMサイズを試着した時の印象とは異なるものになってしまったのであろう。考えてみれば当然のことであるが、サイズが変化すれば、袖丈や着丈、身幅はおろか、身体に着用した時に生じるドレープも変化する。そうした部分の変化に伴い、全体の印象が変化することは当然ある。しかも、その衣服を着用する身体が変われば、同様に印象は変化するのであり、したがって同じ衣服であっても着用者によって異なる印象が形成される。まさに、衣服と身体とは相互に「変形的関係性」にある。つまり、ここでは、身体にとって衣服のもつ「変形的関係性」という性質が露呈しているのである。

次に、第2の観点について。Bは「ど:ですか?」という質問によって、この衣服に対するAの評価を尋ねている。しかし、それに対するAの応答は、問われているAの主観的評価ではなく、Bの評価を問う質問であり、Aによってアジェンダがずらされている。このように、質問の受け手が提示された質問を遡及的に調整する返答を「変容的返答」(transformative answers) (Stivers and Hayashi 2010) と言う。これにより質問の受け手は、質問自体に問題があることや、質問の設計や意図に問題があり直接的な回答が難しいことを示す。Stivers and Hayashi (2010) や北村 (2023) においては Yes/No 質問における「変容的返答」が分析されているが、WH 質問の制約性についても言及されていることから、ここでの「ど:ですか?」についてこの観点で考えてみることは意義があるだろう⁹⁾。つまり、断片3の場合は、Aが「変じゃないですか?」と応答(質問)することによって、Bの「ど:ですか?」という質問自体の含む問題を遡及的に示していると考えられる。それは、そもそもこの衣服が自分(A)に似合っていないのではないかと、という問題である。だから、逆に「変じゃないですか?」とAがBに対して質問し意見を求めている。これは、A

による密かな「抵抗」と見ることもできよう。この「抵抗」は、断片2においてBが丈感に言及した際に、Aが「あ(.)そっか:」という応答によってBの感想を受け入れず自分の感想と並置したことと、少なからず関連しているように思う。この時から「抵抗」の「前置き」は始まっていたのかもしれない。

3.2 「変じゃないですか？」が誘発するF陣形の変容

前章で考察してきた「変じゃないですか？」にもう少しこだわりたい。次の断片4は、断片3と一部重複しているが、「変じゃないですか？」という発話の続きの場面である。トランスクリプトには当該発話時の静止画についても指示してある。

断片4 試着中のLサイズについてクレームを述べる(2) (一部再掲)

- 10A : あ:°なんか° [図4]
 11B : ど:ですか? ((一步鏡側に移動しAを見る)) [図5]
 12A : ()変じゃないですか? ((自分を指さしながら)) [図6]
 13B : ぜん-え(.)なん[で? 全然(.)かっこいいと思う
 14A : [いや(.)なんか違和感 hhh } [図7]
 15B : えほん[とう? え? .hhh [図8]
 16A : [nod そう()かなあ?(.)なんかこうゆう
 17B : 選ばないですか? [図9]



図4 10A「あ:° なんか-°」の場面



図5 11B「ど:ですか?」の場面



図6 12A「変じゃないですか:？」の場面



図7 13Bと14Aの発話の重なりの場合



図8 15S「ほんとう？」の場面



図9 17S「選ばないですか？」の場面

Aが「あ:°なんか°」（10行目）と言いかけた時点で、Bは一步前に踏み出しており（図4の円内）、鏡とAとの間に移動し始める。「ど:ですか？」（11行目）と言いながら鏡を向いているAの顔を覗き込むような動作をする（図5の矢印）。この動作からも、Aが「なんか」と発話した時点で、Bはそれを「前置き」ととらえ、Aが何らかの好ましくない言葉を発することを予期したと考えられる。そして、Aは「変じゃないですか？」と言いながら自分を指さす（12行目、図6の円内）。すると、すぐにBは「なんで？」（13行目）と驚いたような言い方をしつつ褒めるが、Aは「違和感」があることを伝える（14行目、図7）。この時、AはBに近づきながら時計回りに回転し、Bは鏡に向かって後方に移動しながらAに正対する位置に回転する（図7の矢印）。そして、Bは「ほんとう？」（15行目）と言いながら、さらに鏡に向かって後方に移動し、AとBの距離が最も近づく（図8の矢印）。ところが、「選ばないですか？」（17行目）の発話の際には、Aは図5と同じ位置に戻る（図9）。

3.1において、Aによる「変じゃないですか？」がBの感想を求める質問になっていることを確認したが、実はそれに伴い、AとBの立ち位置が変化している。2人以上の場面参加者が対面する際に形成する位置取りのことを「F陣形」（F-formation）（Kendon 1990）と言う。F陣形は基本的に顔の向きではなく下半身の位置と向きによって決まるのだが、当該場面がどのような場面であることを示すとともに、当事者間の関係性をも示す。

試着接客場面においては、しばしば「チェックマーク型配列」(check-marked arrangement) (堀田 2023b) を見出すことができる (図 10) . これは、客が商品としての衣服をあてがったり試着したりして鏡を見ながら、その鏡を介して客と店員とが会話する F 陣形である。鏡に対して正面 (に近い位置) に立つのが客であり、店員は、客よりも手前にいることも後ろにいることもあるが、いずれの場合も、客と鏡を結んだ線から外れた位置に立つ。鏡の外で

会話する場合は「対面配列」(vis-à-vis arrangement) と区別しにくくなるが、客の前に鏡があり、客がその鏡に映る自己像を見ながら他者と相互行為をおこなう F 陣形は「チェックマーク型配列」として捉えることができる。なぜなら、鏡を見る際に価値・規範を一切投影せずに自己像を見ることはできず、鏡像は自己に対する“第三者”の視線を媒介すると考えるからである¹⁰⁾。「変じゃないですか?」の場面では、A が鏡から目線を外し B と対面するチェックマーク型配列になっている。この F 陣形は、この場面のホームポジションである。

さて、A の「変じゃないですか?」の直後の静止画が図 7 である。この最中に、A は右回りに、B は左回りに、身体の向きを変える。これにより、A にとって鏡は左側に位置することになり目線を移動させるだけでは鏡を見ることはできないことから、チェックマーク型配列から対面配列に移行したと言えよう (図 11) . A は変容的返答によって、自分の感想を述べないで、B の感想を求めているが、そのことがこの F 陣形の変容にも表れている。つまり、ここで A にとっては、鏡に映った自己像を参照することはもはや不要であり、B の目に映っている A が重要なのである。この時、わずかに B が先に左回りで動き始め、それに同期するようにして A が右回りで動き始めている。また、B は「ほんとう?」の場面で A の方を向いたままさらに鏡に向かって後方に下がり、A に最も近づき、A をますます鏡から引き離しているかのように見える (図 8) . 事実、A は B の方を向いたまま移動している。そして、「選ばないですか?」(17 行目) の発話と同時に、B も A も元のチェックマーク型配列に戻る (図 9) . つまり、チェックマーク型配列をホームポジションとして、一時的に対面配列を形成し、しかもその時、A は B の感想と意見を求めたということである。



図 10 チェックマーク型配列
(○=客 A, ●=店員 B)

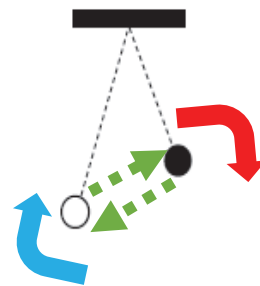


図 11 チェックマーク型配列から対面配列への移行

3.3 成員性カテゴリー化装置¹¹⁾の変容

この対面配列の際には、Bの口調が変化していることにも注目したい。チェックマーク型配列の際の「ど:ですか?」「選ばないですか?」「いつもどんなのを選ぶんでしょうか?」においては、丁寧語が用いられており「ですます調」になっている。Aの方も「変じゃないですか?」までは「ですます調」で話している。ところが、対面配列になってからの「なんで?」「～と思う」「ほんとう?」といった口調は、親しい間柄の人物に向けた発話のようになっており、Aの方の口調も、「なんか違和感」「そうかなあ?」「私ほんとセンスないから」と、やはり親しい間柄の人物に向けた発話のようになっていく。

このようなF陣形と口調の変化は、カテゴリーの変化を表わしているように思われる。すなわちチェックマーク型配列で「ですます調」の時には客と店員の会話に見えるが、対面配列になり口調がフレンドリーになってからは友人同士の会話のように見える。つまり、F陣形と口調の変化によって、異なるカテゴリー化(categorization)を表わしていると考えられる。つまり、F陣形の変容は「成員性カテゴリー装置」(membership categorization device) (Sacks 1972=1989)の変容を表わしているということである。

と同時に、F陣形と口調の変化は成員性カテゴリー装置の変化を表わしているだけでなく、会話内容の変化も表していると考えられる。Aが「変じゃないですか?」という変容的返答によってBに感想を求めると同時に、両者は対面配列に移行している。だが、Bはそれ以前の会話の中で、「こっち(Lサイズ)の方がいいですね」と発言している。BはすでにAが試着している姿を評価しているのである。にもかかわらずAはBに感想を求めている。つまり、ここでAが尋ねようとしているBの感想は、それまでのBの視点とは異なるBの視点であると思われる。それは、「本音/建前」という対比構造のなかの“本音”という言い方もできるかもしれない。実際に、対面配列は、相手の様子をもっともモニターしやすい配列であり(Kendon 1990)、Bの感想が“本音”なのかどうかを確認するには最適であるように思われる。Bの方も、自分の感想が“建前”ではなく“本音”であることを示すために、Aに近づき対面配列を成し、フレンドリーな口調で話しているのではないだろうか。この場面におけるF陣形の変化と発話について、後日Bに確認したところ、「大丈夫、似合ってるよ、ということ伝えたかった」と話していた。つまり、BはF陣形と口調を変えることで、“本音”を話しているという状況をつくり出していたと考えられる。

チェックマーク型配列は、店員にとっては、鏡に映る客と客自身とを見ることができ、客にとっては、鏡に映る自己と店員の反応とを見ることができる。客と店員は、鏡に映る客という同じ対象を見ながらコメントし合うことができる。ただし、鏡に映る自己は、他者が見る自己とは反転している。また、そもそも鏡を前にした自己は特定のポーズや表情をつくっており、鏡がない時の自己とは異なることが多い。私はどこまでいっても他者が目撃しているような“本当の私”をとらえることはできない。だから私たちは、他者にとっての私を追い続ける。その補助をしてくれるのが、試着接客場面における店員や同伴者

といった他者である。しかし、店員と客という関係性は、「売る／買う」という関係性であり、広い意味で利害関係にある。だから、店員というカテゴリーである限り、“本音”ではないかもしれないという可能性がつきまとう。

チェックマーク型配列の場合、客は鏡（と店員）を見ながら、店員は客を見ながら、コメントし合うこともある。この場合、店員は、左右反転していない、文字通り他者の眼で見ていることになる。B は後者のタイプで、自身のセレクトショップにおいて鏡の中の客ではなく客自身を見ながらコメントすることが多い。図 12 のような配列になっており、客の視線は鏡と店員との間を行き来する。

ただし、チェックマーク型配列が「です・ます調」を、対面配列がフレンドリーな口調と結びついている、と言いたいわけではまったくない。A と B は、F 陣形と口調を変化させることで、結果的に視点の変化を表わしたにすぎない。逆に言えば、パースペクティブの変化を表わすために、F 陣形と口調を変化させたということである。

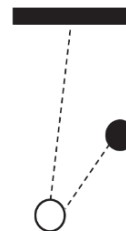


図 12 チェックマーク型配列の
ヴァリエーション
(○=客 A, ●=店員 B)

4 否定疑問形の主張という観点と専門家-素人カテゴリーの実践

再び「変じゃないですか？」という質問に着目したい。

英語の否定疑問文とは異なり、日本語の否定疑問文（「～ではないか」）では、「いいえ」で応答すると「～ではない」という意味になるが、「はい」で応答すると「～ではない」と「～である」という両方の意味を表わしうる。これが「変 - じゃない - ですか？」のような否定的表現を伴う否定疑問文の場合は、「はい」と「いいえ」の両方で応答する可能性はあるが、内容上は「変 - じゃない」が好ましい応答となろう。ところが、「変 - ですよ？」のような否定的表現を伴う疑問文の場合は、内容上は「いいえ」、すなわち「変 - ではない」が好ましいが、会話の優先構造上は（Pomerantz 1984）「はい」、すなわち「変 - である」が優先されるため、ねじれが生じることになる。試着接客場面において「変だよ？」よりも「変じゃない？」が多用されているとするなら、これがその理由であろう。

さて、「変じゃないですか？」は否定疑問形のクローズド・クエスションであり、これへの応答としては、上で確認したように、形式はさておき「変ではない」という内容の応答をすることが好ましいであろう。ただし、店員が「変ではない」と答えるだけでは、おそらく客は満足しない。というのも、店員は当の衣服を勧めている張本人であり、なぜ変ではないのか、この衣服にはどんな良さがあるのかなどについての説明が期待されるからである。つまり、この「変じゃないですか？」は、変ではない理由を述べるよう求めているのであり、単なる質問ではない。

このように、否定疑問形の質問は何らかの主張（クレーム）として受け取られる場合がある。Heritage（2002）は、ニュースインタビュー場面においてインタビュアーが中立性を保ちながら主張・批判の意を含める際に用いられる否定疑問形に着目し、通常の質問は受け手に応答を求めるが、否定疑問形の質問は、受け手に肯定的な応答もしくは反論を求めると指摘している。その理由は、否定疑問形の質問が、発話者の特定の立場を表明している主張（クレーム）として受け取られるからである。だから受け手に対して肯定的な応答、すなわち「～ではない」と応えることを強く期待する。インタビュアーは、こうした形式の質問をおこなうことによって、インタビュイーが同意・反論をおこなう必要のある状況をつくり出し、議論を活発化している。

事実、この「変じゃないですか？」という否定疑問形の質問の後には、この衣服をめぐるさまざまな話題が展開されていく。次の断片5を見ていただきたい。

断片5 ホームポジションに戻ってからのAの普段着をめぐる会話場面（一部再掲）

17B：選ばないですか？

18A：(1.0)(私)ほんとにセンスがな[いから°こういうの°

19B： [hhh

いつもどんなのを(.)選ぶんでしょう[か

20A： [え(.)あんなやつ[hhh((試着室内を指さして))

21B：あ(.)かわいらしい感じ(.)でもこれもいいと思うけど°ん°

(1.0)

22A：あれかわいいですか？((試着室の中にある自分の服を指さして))

23B：かわいいですかかわいいです

24A：かわいい hhh ですか(.)ほ::

対面配列からチェックマーク型配列に戻ってすぐの、Bの「選ばないですか？」は、「あなたがいま試着しているような衣服をあなたは自分では選ばないですか？」という意味のクローズド・クエスチョンである。ところが、Aは「私ほんとにセンスがないからこういうの」（18行目）と再度の「変容的返答」で応答し、Bの質問を遡及的に無効化している。すなわち、Aは「センスがないから」そもそも選ぶ能力を有していないと主張するのである。それに対して、Bは肯定も否定もしない。そして、Bは、Aがいつも着ている衣服について尋ねたり、試着中の衣服がいつも着ている衣服のイメージに近いものであると述べたりしていくが、それに対しAは、自分が普段選ぶ衣服について「あんなやつ hhh」と表現したり、「かわいい」と褒められても「あれかわいいですか？」と言い返したりと、自虐的に聞こえる発言を繰り返す。

断片4において一時的に「友人-友人」カテゴリーが実践された可能性があるが、ホームポジションに戻ってからの会話形式からは別のカテゴリーに変容しているように見える。

A は「センスがない」に加え、試着前に着ていた自前の衣服について「あんなやつ hhh」(20 行目)と自虐的な発言をし、自分の服を褒められた際にも「あれかわいいですか？」(22 行目)と“無知”を表現する。「かわいいです」という B に対し「かわいいですかほ:」(24 行目)と発見的な相槌を打つことで、やはり“無知”だった自分を表現しているように見える。つまり、「選ばないですか？」以降、B はファッションに関する「素人」を実践しているように見える。

B の発話にも変化が生じている。そもそも B による「選ばないですか？」は、A が直前に述べた「違和感」の原因を探ろうとするものであり、普段は選ばないようなタイプの衣服だから「違和感」を覚えた可能性を加味して尋ねている。そして、A の「センスがない」発言後、B は「いつもどんなのを選ぶんでしょうか」と質問の仕方を変え、引き続き A の「違和感」の原因を探ろうとする。つまり、A はこの質問を継続することによって、B よりも衣服に関する知識を有する者であり、したがって A の「違和感」の原因を解明することができる立場を実践している。また、A が試着前に来ていた衣服に対して B は「かわいらしい感じ」と評価をし、やはり (A が有していない) 知識を B が有していることを示しているように見える。試着中の衣服を「かわいい」と表現する¹²⁾ことで、A がいつも選ぶ衣服との連続性を示し「違和感」を解消しようとしているようにも見える。つまり、断片 5 では、知識の非対称性が会話の中に明確に表わされており、A はファッションに関する知識を有していない「素人」、B は有している「専門家」というカテゴリーをそれぞれ実践しているように見えるのである。

そして、その続きの断片 6 では、調査者を巻き込んで会話が繰り広げられる。

断片 6 B が R に感想を尋ねる場面

- 25B : う::ん(2.0)い-い:[ですよ(.)うんい:と思います(.)いいですよね?((R の方を向く))
 26A : () [(せっかく)°決めてもらったんで° ((R の方を向く))
 27R : うん(.)エレガントな(.)ちゃんとしたところにも[()]
 28B : [そうですね:もしあれだったらほん=
 =とそういう(.)なんだろ(.)えっと結婚式とか hhh()にも(.)そういう時にも着=
 =れ(.)と思います
 29A : ほ:んどですか nod
 30B : nod
 31R : うん(.)あのアクセサリーとか[()]くらいの(.)エレガントな感じ
 32B : [そ:そ:そ:そ:
 33A : ふ::ん
 34R : で値段が[ほどよい hhh
 35B : [ね(.)値段がすごいリーズナブルで(.)いいと思う
 36R : ちょっと信じらんない hhh[値段ですよ:ね:

- 37B : [あ:そうですね:え(.)いい感じですよ？
 38A : ですか？
 39B : はい(.)ちょっと光沢感ある感じも((Rの方を見る))なんか(.)うん
 40R : うんうん
 41B : 高級感(.)[ある(0.2)う:ん
 42R : [そそそ:

Bが25行目で、同一のターン内で「いいですよ」「いいと思います」「いいですよ？」と言いつつ方を変えてRの方を向くと、それにつられるようにAもRの方を向く。すると、Rは「エレガントな」デザインで「ちゃんとしたところにも」着ていけると述べる。それを受けてBも「結婚式とかにも」着ていけると言い、Rも「アクセサリーとか」を着けることでアレンジができると述べBが同意する。また、Rが価格の安さに言及した後¹³⁾、Bは「光沢感」「高級感」というワードで試着中の衣服を表現する。このように、BとRは協働して、衣服のアレンジや組み合わせの仕方(31行目)、価格の安さ(34, 36行目)、着用場面(27, 28行目)、衣服の多様なイメージ(27, 31, 39, 41行目)を次々と挙げることで、衣服の変形可能性に言及して説得を試みているように見える。つまり、ここでBとRは、Aの試着姿に対する評価を相互に補強しつつ協働で構築しているのである。

実はこの場面では、トランスクリプトには登場しないがもうひとりの調査者(30代女性)がおり、B、Rと3人で、Aの試着姿をめぐって相互行為をおこなっていた。「客-店員」もしくは「素人-専門家」というカテゴリーおよび関係性からすると、調査者は“部外者”であるが、最終的にはAの衣服選びおよび試着を協働で実践するメンバーとなっていた。このことは25行目のBの発話が、店員もしくは専門家としてのもの(「いいですよ」)から一個人としてのもの(「いいと思います」)に、そして最後には“部外者”を巻き込む仲間(「いいですよ？」)に移行していったことが象徴している。

衣服の買い物には、他の買い物にはあまり見いだせないような、そこに居合わせる他者を巻き込み、評価の協働構築に関与させるという社会的関係の再編が伴う。ここにこそ、衣服の買い物行動の“おもしろさ”があるかもしれない。

5 おわりに

本稿では、衣服の買い物場面、とりわけ試着接客場面をビデオ・エスノグラフィーの手法で分析することを通じて、そこで実践されている特有の相互行為形式をいくつも見出すことができた。

- (1) 私たちは試着中にしばしば「被服性の呈示」という、身体による衣服の対象化実践をおこなっている。これにより、試着中の衣服についての他者からのコメントを引きつけることを可能にしている。

(2) 衣服と身体の相互に変形的な関係性も見出された。あるサイズでは良いイメージであっても、自分の身体により合うサイズになると、自分に合わなくなるということが起こりうる。つまり、衣服のイメージは、衣服と試着者の身体とでつくり上げているものであり、互いに変形し合っている。

そして、試着接客場面における「変じゃないですか？」という発話をめぐる相互行為分析の結果として、次の諸点についても見出すことができた。

(3) A による「変じゃないですか？」を B による「どうですか？」という質問に対する「変容的返答」(Stivers and Hayashi 2010) の観点から分析した結果、それは少なからず発話者の「抵抗」であることから、F 陣形や成員性カテゴリー化装置の変容をもたらし、当事者たちの関係性が変わる契機となっていた。

(3-1) 試着接客場面にしばしば見られる F 陣形としてのチェックマーク型配列が、一時的に対面配列に移行する場面からは、それに伴い両者の口調が変化し、カテゴリーおよび視点の変化の可能性を見出した。場面参与者たちはその場面でのカテゴリーと視点の変化を F 陣形と口調の変化でもって表現していたと考えられる。

(3-2) A と B は「客 - 店員」カテゴリー、「友人 - 友人」カテゴリー、「素人 - 専門家」カテゴリーとさまざまなカテゴリー化実践をおこなっており、その変容のタイミングで「変容的返答」が見出された。

(4) 「変じゃないですか？」という発話形式自体を否定疑問文の質問という観点(Heritage 2002) から分析した結果、相手からの同意や反論を引き出し、議論を活発化することにつながっていた。

つまり、本稿で扱った「変じゃないですか？」は、それ自体の形式においても文脈においても、その後の会話の形式と内容を変容させる転換点あるいは“起爆剤”として機能していたと言えるであろう。

衣服の買い物は、食料品や家電製品の購入とは異なり、場面参与者全員が客の身体-衣服およびそのイメージを造形していく、きわめて創造的な営みである。したがって、衣服の買い物は単なる商品選択ではなく、試着という行為も単なるサイズ確認や「似合うかどうか」の判断でもない。それは、身体配置の組み替えや変容的返答を用いた会話などによって、身体と衣服、空間と関係性、知識とカテゴリーが交差する、複合的な意味生成の場なのである。この過程では、身体と衣服、自己と他者の関係性が再編成され、身体感覚の

再認識、知識の交渉、空間的演出など、社会的かつ感性的に豊かな実践が——ほとんど意識することなく——繰り広げられている。

このようなダイナミズムは、インターネット上での買い物あるいはヴァーチャル試着においては再現することが難しい。対面の試着接客場面は、身体と衣服をめぐる、他者との協働的な意味構築の過程を实らせる土壌なのである。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP23K17573, JP25K05528 の助成を受けたものである。

注

- 1) この観点からの買い物のエンカウンター場面の研究に関しては Mondada, Sorjonen and Fox (2023) がとくに重要であるが衣服の買い物場面については扱われていない。また、衣服の買い物場面ではないものの、Oshima and Streeck (2015) は美容室において鏡を用いて接客する場面に関する相互行為場面を扱っているという点で、本研究がもっとも参考にすべき研究の一つであると考えている。
- 2) ここで述べているショッピングリハビリにおける買い物行動の豊饒性に関する視点、および「家庭内インフルエンサー」の発見は、JSPS 科研費 JP23K17573 の代表者である檜田美雄によるものである。
- 3) 筆者はすでに複数のセレクトショップにおいて試着接客場面の調査研究をおこなっているが、本調査でご協力いただいた B の店を含め、店員（コーディネーター）による接客を前提としている店舗には、大きな鏡が設置されており、客と店員、客と同伴者が、鏡を見ながら会話する光景が頻繁に見られる。しかし、ショッピングセンター内の衣料品コーナーのような、店員による接客を前提としない店舗では、所々に鏡はあるものの比較的小さく、試着室内にある鏡もずいぶん小さい。本稿の草稿段階で B とデータセッションした際に、B は「ショッピングセンターの衣料品売り場の鏡は“かわいくない”」と表現し、洒落た鏡でないといふほどに素敵な衣服を着てもよく見えないのではないかと話してくれた（だから、ハンガーにもこだわり、陳列されている状態も美しく見えるよう工夫をしている）。なお、本調査において、B が客と一緒に鏡を見ながら会話する場面はほぼ皆無だったが、それは鏡の置かれた状況だけが理由ではなく、自身の店舗においても客と一緒に鏡を見ることはほぼせず、客を直接見ながら接客をしていることが理由であると考えられる。
- 4) B は初めて接客する相手の場合、できるだけ小さめのサイズを選んで勧めるようにしているとのことであった。とくに A の場合、身長は高いものの細身であったことと衣服のデザインから、M サイズを勧めたそうである。
- 5) 本稿におけるトランスクリプトで使用した記号の凡例は下記の通りである。
 : 直前の音が伸ばされていることを示す
 ? 語尾の音が上がっていることを示す

- 直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す
- = 途切れなく言葉がつながっていることを示す
- °文字° これで囲まれた個所の音が小さいことを示す
- hhh 笑いながら発せられていることを示す
- (文字) 聞き取りが確定できないことを示す
- () 何か言葉が発せられているが聞き取り不可能であることを示す
- (数字) 数字の秒数だけ沈黙のあることを示す
- (.) ごくわずなか間合いがあることを示す
- [発話および動作の重なりが始まりを示す
- nod 頷きを示す
- ((文字)) 動作や補足を示す

6) 「丈感^{たけかん}」とは、衣服の長さ（丈）についての感覚のことを指し、着丈や袖丈に関して言及する際に使用することができる。

7) M サイズ、L サイズを着用した直後に見られるこの特有の動作には、アフォーダンス的な観点から、衣服がもたらす動作という側面が少なからず影響していると考えられる。装いがもたらす動作や活動の可能性についてはすでに指摘されている（Budgeon 2003）が、インタビューやアンケートといった言語的手法ではなく、ビデオ・エスノグラフィー等の動作研究を通じてその可能性を明らかにする研究は、管見の限りまだ十分におこなわれていない。

8) ターン末尾に現れる「うん」は「『話し手自身、先行発話に納得しており、これ以上付け加える情報はない』ことを表わすため、『うん』の後はターン以降可能場所となる」（佐藤 2005: 119）のであり、その意味でこの「うん」は緩やかな説得であると考えることができよう。

9) 「変容的返答」は、大きく分けて 2 つのやり方がある。一つは「用語変容的返答」（term-transforming answers）であり、質問の制約を調整すると同時に、調整後の質問を肯定するような返答である（Stivers and Hayashi 2010: 13）。たとえば、「〇〇を食べたことはある？」という質問に対する「一度試してみた」という返答は、質問の制約（食べたことがあるか否か）を調整し、「食べた」を「試した」に置き換えることで、1 人前分食べたわけではなく味わったことを伝えている。この場合、質問が遡及的に言い換えられているものの、質問の意図あるいはアジェンダ自体は否定されてはいない。もう一つは「アジェンダ変容的返答」（agenda-transforming answers）であり、やはり質問の制約を調整するが、質問のアジェンダそれ自体を否定するような返答である（Stivers and Hayashi 2010: 20）。ここで「アジェンダ」とは「質問者がその質問でしようとしていること」を指す（Stivers and Hayashi 2010: 20）。たとえば、「近所で〇〇さんを見たことある？」という質問に対する「あの人は引っ越したよ」という返答は、質問の制約（〇〇さんを見たことがあるか否か）自体から逸脱し、そもそも〇〇さんは引っ越して近所に住んでいないということを

伝えている。これは、「用語変容的返答」よりも制約に対する抵抗の度合いが強い。とりわけ、質問の前提条件に抵抗するものである場合は特に強い抵抗形態であると考えられている。ここでの「変じゃないですか?」という変容的返答は、「アジェンダ変容的返答」になっており、より強い「抵抗」が示されていると言えよう。

10) Kendon (1990) が示した F 陣形は人間の配列を示しており、その意味では鏡を含む「チェックマーク型配列」は対面配列の傍らに鏡があるにすぎないという考え方もできよう。しかし、鏡を介して客と店員が会話することがあるということのみならず、私たちは鏡を見る際に、まったく自由に自己像を見ることはできない。それは、私たちのパースペクティブには「一般化された他者」のそれが含まれているということでもある。この点については別稿でより丁寧に考察したい。

11) 「Membership Categorization Analysis, MCA」は、一般に「成員カテゴリー化装置」と訳されるが、本稿では岡田 (2025) にならい、「成員性カテゴリー化装置」の訳語を用いる。

12) このことは、断片 3 において A の「変じゃないですか?」という質問に対し、B が「かつこいいと思う」(13 行目) と応答していたことと矛盾するように見えるかもしれないが、身体と衣服との間にある相互変形的関係性という性質ゆえであると考えれば矛盾しないであろう。

13) A が試着しているこの衣服は、2,480 円 (税別) であった。

参考文献

- 荒川歩・木戸彩恵, 2023, 「探索空間としてのよそおい」荒川歩ほか編『〈よそおい〉の心理学——サバイブ技法としての身体装飾』北大路書房, 191-213.
- Budgeon, Shelley, 2003, “Identity as an Embodied Event,” *Body and Society*, 9(1): 35-55.
- Heritage, John, 2002, “The Limits of Questioning: Negative Interrogatives and Hostile Question Content,” *Journal of Pragmatics*, 34: 1427-46.
- 堀田裕子, 2021, 「『試着のエスノメソドロジー』の可能性——何がどのように試着されるのか」『現象と秩序』(14): 1-20.
- 堀田裕子, 2023a, 「鏡に映る自分を褒めることはいかにして可能か——試着場面における『かわいい』をめぐる相互行為分析」『現象と秩序』(18): 23-46.
- 堀田裕子, 2023b, 「試着接客場面における F 陣形——チェックマーク型配列の発見, あるいはアクターとして鏡をとらえること」『現象と秩序』(19): 35-56.
- 泉加代子, 2006, 「要介護高齢者とファッション・セラピー」『日本衣服学会誌』50(1): 17-22.
- Kendon, Adam, 1990, *Conducting Interaction: Patterns of Behavior in Focused Encounters*, Cambridge University Press.

- 北村隆憲, 2023, 「法廷尋問のコミュニケーションを可視化する——反対尋問の相互行為分析」 榎田美雄・北村隆憲・米田憲市・岡田光弘・曾場尾雅宏『法実践（リーガル・コミュニケーション）の解剖学——ビデオ・エスノグラフィーから臨床法学へ』晃洋書房, 173-212.
- Mondada, Lorenza, M-L.Sorjonen, and B.Fox, “Encounters at the Counter: An Introduction,” B.Fox, L.Mondada and M-L. Sorjonen, 2023, *Encounters at the Counter: The Organization of Shop Interactions*, Cambridge University Press, 1-36.
- 岡田光弘, 2025, 「成員性カテゴリー化装置を用いて分析すること」, M.トラヴァース・J.F.マンゾウ（北村隆憲・岡田光弘・池谷のぞみ・小宮友根訳）『法のエスノメソドロジー——「生ける秩序」の法社会学』新曜社, 138-40.
- Pomerantz, Anita, 1984, “Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes,” J. M. Atkinson and J. Heritage eds., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press, 57-101.
- Ohima, Sae and Jürgen Streeck, 2015, “Coordinating Talk and Practical Action: The Case of Hair Salon Service Assessments,” *Pragmatics and Society*, 6(4): 538-64.
- Sacks, Harvey, 1972, “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology,” Sudnow, D. ed., *Studies in Social Interaction*, New York: FreePress, 31-74. （北澤裕・西阪仰訳, 1989, 「会話データの利用法——会話分析事始め」 Gサーサス・Hガーフィンケル・H.サックス・E.シェグロフ『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社, 93-173.）
- 佐藤有希子, 2005, 「日本語母語話者の雑談における『うん』と『そう』——フィラーとして用いられる場合」『国際開発研究フォーラム』(29): 107-24.
- Stivers, Tanya and Makoto Hayashi, 2010, “Transformative Answers: One Way to Resist a Question’s Constraints,” *Language in Society*, 39: 1-25.

【編集後記】『現象と秩序』第23号をお届けします。

今号では複数の論文（加戸論文，真鍋論文，岡田論文）に360度全方位ビデオカメラが出てきます。360度全方位カメラは，岡田（38頁）が言うように「多視点カメラ」です。すなわちソフト的な操作によって，事後的に視点を自由に設定した2次元動画を創り出せます。360度ビデオカメラを複数台用いた調査データなら，少なくとも視覚的環境に関しては，環境全部をまるごと保存したデータであるといえるでしょう。しかし，この「まるごとさ」は調査にとって朗報でしょうか。簡単にはそうとは言えないと思います。それは，ビデオカメラの「画角」が「視野範囲類似的志向性」を失ったことによる困難を我々は無視できないからです。じつは，これまでのビデオデータを用いた研究は，自覚しない形で，この「視野範囲類似的志向性」を活用して研究をしていました。我々の眼は，世界を視野的に切り取る働きをしていて，そこに，志向性の根拠も，視線を向けられたことに対する反応の根拠もあったのですが，ビデオカメラがとらえた映像を分析する際にも，我々は，人間の眼の働きにおいて有意義化していた諸概念を，ほぼそのまま流用していたのです。これまでのような野郎図的な流用は今後はもうできないかもしれない……。これは，ビデオを利用した人文・社会科学の危機です。しかし，この現在の危機的状况には解放の側面もあるかも知れないということ，岡田論文は訴えています。じつは，他の論文（堀田論文，藪本論文，松浦論文）も，見る／見られることにかかわる論文です。普通の障害経験の語りとは違う位相から「ろう者の語り」を分析した飯田論文同様，本号には，我々が世界を知るためにどのように感覚的常識を生きたり，生きなかつたりするべきか，に関して示唆的な論文が集まっています。本号もどうぞお楽しみ下さい。なお，本号掲載の特集は，ショッピングリハビリ共同研究（科研費23K17573）の成果の一部です。ファンド提供者に記して感謝します。（Y.K.）

『現象と秩序』編集委員会（2025年度）

編集委員会委員長：堀田裕子（摂南大学）

編集委員：樫田美雄（摂南大学），飯田奈美子（関西外国語大学），加戸友佳子（摂南大学）

編集協力：村中淑子（桃山学院大学）

編集幹事：大江勇輝（京都産業大学）

『現象と秩序』第23号

2025年10月31日発行

発行所 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学 現代社会学部 樫田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX：072-800-5389（樫田研），e-mail：kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN：2188-9848， ONLINE ISSN：2188-9856

<https://gensho-kashidayoshio.sakuraweb.com/> （←昨年から新サイトになりました）
